



ココに、住む

私だからこそ見えてきた宇和島の良さ

今月は、市外での生活を経験した人ならではの視点で、
宇和島の「日常の豊かさ」について考えます。
宇和島に住みたい。その理由の1つひとつには、
私たちにとってとても大切に、
誇りに思える豊かさが隠れています。

若

松

優

一

朗

さん



吉田高校卒業後大学進学のため千葉、東京で生活。カナダやオーストラリアなど海外にも移り価値観を磨く。平成31年4月にUターン。家業のミカン農家の後継者。

「自然」が近い。それだけで 仕事も遊びも、何でもできる



若松さんは、大学進学を機に宇和島を離れました。大学では観光振興を専攻。授業を受ける中で、ふと頭をよぎったのが宇和島の景色や食べ物でした。海や山などの自然に囲まれ、ミカンや魚など観光資源になるものがたくさんある。若松さんの中で宇和島の価値観が見直され、Uターンのきっかけとなりました。

それ以来、若松さんは祖父母が営むミカン農家を継ぐことを志すようになりました。しかし大学を卒業してもすぐには帰郷しませんでした。「すぐに帰って継ぐこともできるけれど、自分のやりたいことをひと通り経験したい。きっと将来役に立つ



はず」との想いで、趣味のスケートボードを続けながら、国内外でカフェやホテルの店員などを経験しました。帰郷後は、県ミカン研究所の研修生として今の時代の農業を1年間学び、今年の4月からミカン農家として汗を流しています。

何もないとか言っちゃダメ

「宇和島には何もないなんて言っちゃダメ」と話す若松さん。東京にも海外にもなかったものが身近にある。特に、仕事にも遊びにも発展できる自然があることは、大きな強みだと話してくれました。

- ①地元にエンターテインメントを。趣味のスケートボードパーク付ゲストハウスを作ることが夢
- ②自作のジュース。ラベルはモデル兼イラストレーターの奥さんが制作
- ③摘果方法など1人前の農家になるため勉強中



①

三間町で酒屋「KOUJIYA」を営む夫婦。三間町出身の雄大さんが東京で出会った未来さんと一緒に5年前にUターンしました。上京後も、いつかは地元に戻る気持ちだった雄大さん。一方、未来さんは東京生まれの東京育ち。渋谷で有名ブランドのデザイナーとして活躍するなど田舎暮らしに縁もなく、移住の説得は困難を極めました。

きっかけとなったのは、未来さんの妊娠でした。お腹が大きくなった未来さん。通勤では満員電車で揺られ、妊婦マークは付けていたけれど、気にしてもらっているのかわからな



③



②

①築120年以上の酒屋を改装②おしゃれな店内には自分たちがセレクトしたワインや雑貨が並ぶ③「誰かにプレゼントしたくなるお米」がコンセプトのMIMARICE。お菓子のようなポップなデザインは未来さん作。

い。そのときに、感じた都会暮らしのストレスが、田舎暮らしへの第一歩となりました。

素材がゴロゴロある

田舎はビジネスにとって素材の宝庫と話す雄大さん。自分たちの考えを生かせる素材がたくさんあり、「個」が生きる贅沢な場所と話します。一方、未来さんは、生活の中でゆっくりとした時間を感じられるところ。のびのびと子育てできる環境は、都会にはないココロの豊かさを感じられると話してくれました。

豊富な素材をもとに、 「個」が生きる贅沢な場所



高	白
山	鳥
雄	未
大	来

さん

雄大さんはミュージシャンとして東京で芸能の道に。未来さんは有名洋服ブランドのデザイナー。結婚を機にUターンし、雄大さんの実家が営む酒屋を継ぐ。

野

澤

美香

さん



岐阜県出身。助産師・保健師・救急救命士。JICAの健康管理員としてカンボジアでも活動。定年退職後、地方で経験を生かしたいと移住を決断。

ゆったりと流れる時間の中で、 どこか安心できる「島」暮らし



①

定年退職で現場を退いた野澤さん。しばらくゆっくりと過ごそうと考えていたものの、どこか物足りない毎日を過ごしていました。医療で困っている地域があるのではないかと思い移住計画が始まりました。四国には縁もゆかりもない野澤さん。漠然と「島」での生活を考えていたところ、大阪で行われた移住フェアで宇和「島」と出会いました。移住相談員と話すなかで、「島の保健室」開設の動きがあり、保健師が必要になることを知りました。

その後、島の保健室を運営する「社会福祉法人 正和会」や地元の人たちの協力もあり移住の準備を整え九

島にやってきました。
どこか安心できる

着任後、まだ地域の状況もわからないころにかかってきた1本の電話。少し具合が悪そうな女性の声でした。心配になった野澤さんは地域の人を頼りました。すると瞬間にひろがる島の連絡網。地域の人たちのつながりの強さに驚いたそうです。普段は穏やかでゆったりしているけれど、いざというときは頼りになる。どこか安心できる環境が心の余裕につながっていますと話してくれました。



③



②

①旧診療所を改修した島の保健室②保健師が常駐し、健康相談や健康づくり活動を行う③見守り弁当の配達。身体の具合など健康状態を聞き取る

「食」べるものの豊かさ 助けあえる地域のつながり

千

葉

陽

亮

さん

埼玉県出身。専門学校在学中に漁業就業支援フェアで宇和島に会う。三浦地区で3年間の研修期間を経て独立。真珠業者として奮闘中。

毎日電車で揺られながら1時間以上かけて出社する周りのサラリーマンの姿。学生時代から見慣れた都会の景色にストレスを感じていたと話す千葉さん。就業支援フェアで宇和島と出会い真珠養殖業に就きました。従業員ではなく、独立できるという勤務形態に惹かれたそうです。本場にきれいな珠たまを出せる技術はまだ確立されていない。そこに自分の挑戦が生かされるのではないかと話します。千葉さんは、代々受けつがれてきたわけではない「一代目」だからこそ、これまでの固定観念に囚われない自分なりの作り方、売り方で挑戦したいと想いを語ります。

隣人を越えて助け合うつながり

独立後も、まだまだアルバイトをしながらの厳しい生活。地域の人たちの支えは大きいと話します。都会では付き合ひがあるのは両隣くらいだった。ここでは、地域の人たちが余った野菜や多く作ったおかずをおすそわけに来てくれる。家の前では魚が捕れたり、「食」の豊かさに助けられていると話してくれました。

宇和島には何かある。

テーマパークやショッピングモールはない。それでも、いつかは帰りたい、ここに住みたいと思つて宇和島に住む人は少なくありません。人それぞれ違いはあれど、宇和島での生活のどこかに感じている豊かさ。それは、宇和島に住んでいる私たちには当たり前で、少し見えづらくなっているのかもしれない。

令和元年度に実施したアンケート調査(うわじまブランド魅力化計画)では、市内在住者の愛郷心、満足度、定住希望は50%前後と決して高いとは言えない結果となりました。今こそ私たち1人ひとりが、日常にある宇和島を見つめ直す必要があるのではないのでしょうか。

今回の取材では、「宇和島には何もない」と言わないことの重要性を感じさせられました。宇和島には何かある。「住みたくなる、帰りたいくなる、連れて行きたくなる」まちなちを目指して、皆さんも宇和島の日常にある豊かさについて改めて考えてみてはいかがでしょうか。